

小学校外国語活動へのコーパス言語学的アプローチ： 語彙の品詞・意味、及び文法

藤原 康弘

愛知教育大学

1. はじめに

本稿の主たる目的は小学校外国語活動の言語的特徴、即ち語彙、及び文法的側面を、コーパス言語学的アプローチから明らかにすることである。周知のように、平成20年3月告示の新学習指導要領により、平成23年度から小学校で「外国語活動」が必修化され、中学校英語教育は小学校外国語活動を受けた内容に変更されており（文部科学省，2008a; 2008b）、日本における英語教育は大きな転換期を迎えている。その転換期において、幾つかの研究開発校等で優れた教育実践が散見されるものの（e.g. 松川・大下，2007）、多くの小学校現場では混乱がみられ（鳥飼，2006）、現状では小学校外国語活動と中学校英語教育における指導内容の連携が不明瞭なままであると言わざるを得ない。つまり現状において緊急かつ重要な課題の一つに「小中連携」が挙げられる。

「小中連携」において、初段階でまず行うべきことは、小・中の教員がお互いの学習内容を相互に把握することであろう。樋口他（2003, p.27）は小中連携を意義あるものにするために重要なことは、「校区内の小・中教員が率直に情報交換し合える機会を作り、相互の英語活動、英語学習の実態を把握すること」と指摘し、当指摘は文部科学省が2009年に発行した教員向けの「小学校外国語活動ガイドブック」にも見受けられる：

学校区内での小学校の外国語活動の実際を互いに理解するために、目標・指導内容・指導方法について、意見交換をする機会を持つことが必要である。・・・小学校で扱った話題、言語材料（表現・語彙）等の一覧の資料があれば中学校に提供すると良い（文部科学省，2009, p.40）

そこで本稿では、英語教育における小中連携を円滑に行うため、各種小学生用・児童用英語教材、および教師用指導書やCDスクリプトと、3種の中学校英語検定教科書で構築された各コーパスの比較を通し、日本における小学校英語活動、および中学校英語教育のある程度の全体像を、小・中、両種の教員に提供することを試みる。

2. 先行研究

小学校英語活動は、2002年度より総合学習の一部として、多くの公立小学校で実施されるようになり、2011年度からは独立した領域として小学校5・6年で年間35時間の必修カリキュラムが施行される。その経緯をふまえ、当該期間中に理論、実践、また教材に関する多くの先行研究が行われてきた。当章では教材に関連する研究に焦点を絞り、語彙（樋口他，2003; 樋口他，2004; 西垣・中條・西岡，2007; 神谷他，2009; 中條・西垣，2010; 石川，2005; 2007; 石川・

中嶋, 2010)、文法(樋口他, 2003; 酒井, 2007; 神谷他, 2009)の先行研究を総括し、検証すべき項目を挙げ、研究課題を提示する。

2.1 語彙

小学校英語活動における語彙研究は、コーパス研究の実施容易性と、語彙的アプローチ(Willis, 1990; Lewis, 1993)の台頭により言語力の基盤として語彙力が注目されていることから、今まで多くの研究がなされ、各種語彙表が今では利用可能である(e.g.『英語ノート語彙表』(中條・西垣, 2010))。当研究群はa)小学校英語活動用テキスト(学校独自教材および市販のテキストを含む)と教師用指導書を分析対象とした研究(樋口他, 2003; 樋口他, 2004; 西垣・中條・西岡, 2007)と、b)共通学習内容として文部科学省が発行した『英語ノート』と教師用指導書を分析対象とした研究(神谷他, 2009; 中條・西垣, 2010)に大別され、語彙の焦点としては1)品詞と2)意味に分けることができる。

まず1)品詞について全ての研究に報告されていることは、名詞の割合が圧倒的に高いことである。樋口他(2003)は、中学1年生のテキストにおける名詞の割合が46.4%-49.1%であるのに対し、小学校テキストは73.0%-78.6%と報告している。付け加えて、神谷他(2009)は『英語ノート(試作版)』に出現する語彙リスト中の名詞の割合は74%(251語)と報告し、言語習得段階の初期において名詞の割合が高くなることは通例であることを考慮しても(第一言語習得、同程度の段階においては55%程度)、『英語ノート』中に圧倒的に名詞が含まれていることを指摘している。また西垣・中條・西岡(2007)は小学校英語活動用テキストを網羅的に収集したコーパスの分析より、名詞の割合が高いこと、中高では動詞、形容詞、副詞の割合が高いことを指摘している。

このような名詞の割合の高さは、児童の能力、興味、環境などの多様さに対応できるように、「名詞は多めに、段階を超えた形で揚げる」(中山, 2001; p.325)という主張や、小学校英語教育用基本語彙表(KUBEE)(石川, 2005; 2007)に小学校段階では習得目標とする語彙のみではなく、言語活動の過程で提示する語彙として多種多様な名詞(さなぎ:pupa等)が含まれていることから、小学校英語の特徴として確認できる。

次に2)意味領域に関しては、総合学習の一部として導入された初期に、指針として、「あいさつ」「人間関係」「数字」「場所」「季節」など18の意味領域(文部科学省, 2001)や、動物、海・川・池などに住む生き物、果物・野菜など30以上の領域(中山, 2001)が提示され、それらの情報を基に小学校英語活動が実施されることとなった。

実際に小学校英語活動用教材等に頻出する意味領域を分析した先行研究(樋口他, 2003; 西垣・中條・西岡, 2007; 中條・西垣, 2010)の結果を次の表に総括する。

表 1：意味領域における先行研究総括

小学校	中学校（中高） ⁱ
日常生活	スポーツ・楽器・趣味
食べ物・食事	抽象：度合
人間関係	空間・時間
体の部位	思考：文法・音声コミュニケーション
季節・月・曜日	
行事	
生物：哺乳類（動物）	
娯楽・スポーツ・ゲーム	

またとりわけ動詞に関しては、状態動詞よりも動作動詞が多いこと（樋口他，2003）、より詳細な動詞の頻度分析においては、次の動詞タイプの順序が確認されている：1) 活動動詞（e.g. swim, study）、2) 状態動詞（e.g. be, have, want）、3) 到達動詞（e.g. go, come, grow）、4) 達成動詞（e.g. make, break）（神谷他，2009）。

以上の研究結果を縫合すると、1) 具体—抽象（樋口他，2003；西垣・中條・西岡，2007；管，2009）、2) 日常（身近）—社会（樋口他，2003；西垣・中條・西岡，2007）、また動詞においては、3) 実際に動作可能で、身体感覚に関連付けられる動詞（樋口他，2003；石川・中嶋，2010）の3つの観点を確認できる。しかしながら、当結果には、「スポーツ」の意味領域が小中両方に重複している点などに象徴されるように、必ずしも一貫性が見出されない。その原因は、上記のように分析対象として用いたテキスト群が不統一であること、また意味領域の範疇が研究間で統一されていないことの2つが考えられる。よって、言語集積データは各種小学校用テキストや『英語ノート』、教員用指導書に記載のある教室英語やCD スクリプト等の音声資料を含み、意味領域の分析において、依拠できる客観資料を用いて研究結果を再度統括し提示する必要がある。

2.2 文法

小学校英語活動における文法研究は、上述の語彙研究に比べて非常に希少である。その主たる理由は、「小学校学習指導要領解説・外国語活動編」（文部科学省，2008c，p.9）にも明記されているように、小学校外国語学習の目的は、「細かい文構造などに関する抽象的な概念を理解したりする」ことではなく、「体験的に「聞くこと」「話すこと」を通して、音声や表現に慣れ親しむこと」であるからであろう。つまり知識や技能の定着を目指すのではなく、あくまで慣れ親しみコミュニケーションへの態度を育成することが図られており、文法は学習の目的でも焦点でもないためと考えられる。

しかしながら、各研究者も指摘しているように（e.g. 神谷他，2009）、小学校外国語活動で総じて取り扱われている言語材料、換言すれば児童が「慣れ親しむ」可能性の高い言語材料を、小中教員および英語教育関係者が把握することの重要性はより強調されてよい。以下の表は先行研究（樋口他，2003；酒井，2007；神谷他，2009）を概括した表である。

i 樋口他（2003）では比較資料として中学1年生用テキストを、西垣・中條・西岡（2007）、中條・西垣（2010）では彼らが構築した中学校・高等学校英語教科書コーパスから適宜抽出した言語資料を用い、小学校で頻出する意味領域を特定している。故に中学と中高というラベルを並列して表記した。

表 2：文法における先行研究総括

小学校	中学校
勧誘文 (Let's ~)	三単現の s / 三人称疑問文
命令文	人称代名詞複数形 (we, you, they)
有生物主語文 (内, 1 人称文多数)	過去形
	be 動詞, 一般動詞の否定文
	現在進行形, 助動詞 can などの否定文
	所有の表現, Whose ~ ?
	接続詞
	定冠詞, any と some など名詞の修飾語
	頻度を表す表現
	無生物主語文

2.3 研究課題

上記に示したように、小学校外国語活動における言語的特徴の研究、即ち語彙における品詞、意味の多数の研究、また稀有な文法的特徴の先行研究がなされ、ある程度の小学校英語、中学校英語の棲み分けがなされていることが確認される。しかしながら、近年に『英語ノート』が発行され着目を浴びたことから、研究間で対象資料（小学校英語活動用テキストの種類、および『英語ノート』）と比較資料（中学生用テキストの種類、または独自に構築した子供用英語リスト）において統一性が見られない。よって豊富な対象資料と比較資料を用意し、ある一定の客観基準と手順を用いた研究により、先行研究の結果を検証する必要がある。そこで、本研究では小学校英語活動と中学校英語教育との連携を図るべく、以下の研究課題を検討してゆく。

- (1) 中学校英語教科書との比較を通して、小学校外国語活動の語彙にはどのような品詞の特徴があるか？
- (2) 中学校英語教科書との比較を通して、小学校外国語活動にはどのような文法の特徴があるか？
- (3) 中学校英語教科書との比較を通して、小学校外国語活動の語彙にはどのような意味領域の特徴があるか？

3. 研究手法

上述の3つの研究課題に答えるべく、以下に述べる言語資料、分析ツールを利用し、分析を行う。

3.1 言語資料

小学校外国語活動の対象資料として、以前筆者達が構築した『日本小学校英語コーパス』(Corpus of English for Japanese Elementary Students: CEJES: 仁科・藤原・松岡, 2009) を本研究の目標に合致するように、改訂を行った。改訂に至った諸点は次の通りである: 1) 中学校1年生用教科書の削除、2) 『英語ノート』の追加、3) 音声資料の追加。1) については、前研究(仁科・藤原・松岡, 2009)では、小・中の定型表現・フレーズにおける「重複」に関する

基礎資料の作成が主たる目的であったため、中学校1年生用テキスト4種をデータとして含めていたが、本研究では小・中の言語材料の「区別」が目的であるため、中学校テキストを除去した。2) については、前述のように小学校英語活動テキストと近年発行された『英語ノート1・2』を統合した研究は皆無であり、包括した研究結果を提示する必要があるためである。3) に関しては、『英語ノート』を含め、小学校英語テキストにはイラストや写真が多く、英語の文字や文がほとんどないⁱⁱ。したがって実際に授業で取り扱われる教室英語やCD音声における英語を補完するために、総合学習における英語活動の教室英語の資料（中山兼芳，2001；文部科学省，2001）、小学校外国語活動の資料として『英語ノート指導資料第5学年』、『英語ノート指導資料第6学年』記載の教室英語（教師・児童の両方を含む）、及びCDスクリプトを音声資料として追加した。最終的に以下に示す計20冊を本研究におけるコーパスとして使用する。

- 千葉県成田市立成田小学校英語研究部（2002）Let's Have Fun! 1～6 開隆堂（計6冊）
- 松本青也他（2001）Sunshine Kids Book 1・2 開隆堂（計2冊）
- 渡邊時夫他（2004）Kids CROWN スタンダード・アドバンスト 三省堂（計2冊）
- 山上登美子（2006）『English for you 児童英検問題集（Bronze・Silver・Gold）』成美堂
- 中村彰伸（1999）『English for you 児童英検1・2・3級問題集』成美堂
- 緑川日出子（2003）『児童英検全グレード対応ドリル』アルク
- 財団法人日本英語検定協会（2005）『児童英検サンプル問題（Bronze・Silver・Gold）』日本英語検定協会
- 中山兼芳編（2001）『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社 pp 310-323.
- 文部科学省（2001）『小学校英語活動実践の手引』開隆堂 pp7-13.
- 文部科学省（2009）『英語ノート第5学年』教育出版
- 文部科学省（2009）『英語ノート第6学年』教育出版
- 文部科学省（2009）『英語ノート指導資料第5学年』開隆堂
- 文部科学省（2009）『英語ノート指導資料第6学年』開隆堂

次に比較資料として、中学校教科書は平成18年度版の英語検定教科書7種の内、採択率の高い次の教科書シリーズを使用した。以降、便宜上、当中学校英語教科書データを Junior High School Text (JHSTX) と呼ぶ。

- NEW HORIZON 1-3 東京書籍（計3冊）
- NEW CROWN English Series 1-3 三省堂（計3冊）
- Sunshine English 開隆堂 1-3（計3冊）

『日本小学校英語コーパス』（CEJES）と中学校教科書データ（JHSTX）における述べ語数（token）、異語数（type）と語彙多様性の指標である TTR、標準化 TTR、Guiraud 値を示す。Guiraud 値以外はすべて WordSmith 4.0 で得られた数値である。両コーパスを比較すると、CEJES は計20冊、JHSTX は計9冊といふかなり差のあるデータ構成であるが、述べ語数は JHSTX の方が多いことから、小学校英語教材が文ではなく単独語を提示する語彙中心であることが推察される（仁科・藤原・松岡，2009）。付け加えて、語彙多様性においては、全ての指標において小学校英語教材の方が若干ではあるが数値上高いことから、多種多様な名詞が導入されていることが予見できる。当結果については後に詳述する。

ii 当コーパスにおいては、教科書におけるイラストや写真において、明確だと思われる英単語は含めてある。

表 3 : CEJES, JHSTX における述べ語数, 異語数, TTR, 標準化 TTR, Guiraud 値

	CEJES	JHSTX
Tokens	34,008	47,754
Types	2,861	2,985
Type/Token Ratio	8.41	6.25
Standardised TTR	35.73	33.30
Guiraud	15.51	13.66

3.2 分析ツール

分析ツールは、主として、英国ランカスター大学計算機工学科開発の WWW 上で利用可能な多機能コーパスツール、Wmatrix2 (Rayson, 2009 : <http://ucrel.lancs.ac.uk/wmatrix/>) を用いた。Wmatrix2 はコーパスにおける各語・フレーズに品詞および意味領域タグを付与、個々の表記形、品詞・意味タグの頻度表の作成、また参照コーパスとの比較によるキーワード分析を可能にする多機能なコーパス分析ツールである。当ツールで計量されない側面については WordSmith4.0 を用いた。

3.3 研究上の問題点

研究上の問題点として、1) WordSmith4.0, Wmatrix2 の語カウント法の差異、2) 自動品詞・意味タグ付与によるエラーが挙げられる。1) については、各コーパスツールにより、「語」及び「フレーズ」の概念が異なるため、表 3 に示した WordSmith4.0 におけるコーパスの全体的計量と以下に示す Wmatrix2 の分析における語の切り取り方が異なることであるⁱⁱⁱ。よって、表 3 は全体的傾向を掴むに留め、以下の分析で詳細を検討する。

2) においては、Wmatrix2 に実装されているランカスター大学が開発した品詞タグ付与プログラム (CRAWS: Constituent Likelihood Automatic Word-Tagging System)、意味タグ付与プログラム (USAS: University Centre for Computer Corpus Research on Language, Semantic Analysis System)、いずれも本論執筆時点において精度と信頼性共に非常に高いタガーとして広く認知されているが、コンピューターによる自動解析のためエラーは免れない：エラー率は CRAWS は 3-4%、USAS は 8-9%程度と報告されている。付け加えて英語教科書には通常の文ではなく、新語提示などによる独立単語、問題提示のための空欄、並べ替え等が含まれているため、エラーがより含まれている可能性が高い。

しかしながら、全ての語、フレーズに品詞、意味タグを付与し、参照コーパスとの比較を可能にし、対象、参照コーパスの全体的傾向を掴む上で、Wmatrix2 以上に優れたプログラムは現時点において、私の知識の及ぶ限り存在しない。よって、本研究ではエラーの影響を最小限に抑えるために、統計における有意差水準を最も高いレベルに引き上げ ($p < .001$)、小学校外国語活動の言語的特徴のマクロな分析として上記の手順で研究を進めた。

iii 例えば、one, two 等の数字は WordSmith (WS) では全て # (number) で処理されるが、Wmatrix (WM) では個別に処理されることや、go straight を WS では 2 語とカウントするが、WM は 1 フレーズとしてカウントする。

4. 結果と考察

以下に CEJES における高頻度語、高頻度品詞タグ、及び意味タグ、また JHSTX との比較を通じた CEJES の品詞における過剰使用・過小使用、意味における過剰使用・過小使用の結果を示し、考察を加える。文法においては、CRAWS の品詞タグセットにより、文法項目も提示されるため、品詞と同セクションに結果を示す。

4.1 高頻度語

まず高頻度語であるが、以下の表 4 を参照していただきたい。顕著な傾向を示しているのは、1 人称代名詞 (I)、2 人称代名詞 (you) が圧倒的に多いことである。通例、BNC 等の均衡コーパスでは冠詞 (e.g. the, a)、前置詞 (e.g. of, to)、接続詞 (e.g. and) が上位 5 位を占めるが、CEJES では I, you の代名詞が 1 位、2 位にランクしている。

表 4: CEJES 改訂版における上位 50 種の高頻度語 (R: Rank, W:Word, F:Freq)

R	W	F	R	W	F	R	W	F	R	W	F	R	W	F
1	I	1572	11	it	423	21	have	215	31	on	145	41	listen	107
2	you	1087	12	what	419	22	see	193	32	there	141	42	one	103
3	the	1010	13	and	301	23	want	185	33	play	139	43	fine	101
4	a	832	14	like_V	287	24	yes	181	34	2_no.	131	44	please	99
5	is	724	15	this	281	25	n't	177	35	1_no.	131	45	happy	99
6	'm	598	16	in	272	26	no	162	36	lesson	127	46	let	99
7	's	530	17	your	257	27	can	160	37	we	122	47	where	99
8	to	507	18	hello	247	28	go	153	38	name	115	48	hungry	96
9	do	497	19	how	234	29	good-bye	152	39	me	113	49	at	94
10	are	438	20	my	219	30	let_'s	148	40	he	110	50	ok	94

4.2 高頻度品詞、及び意味タグ

ここでは CEJES 内の高頻度品詞、及び意味タグ上位 30 語を検討する。表 5 に示されているように、先行研究 (樋口他, 2003; 樋口他, 2004; 西垣・中條・西岡, 2007; 神谷他, 2009; 中條・西垣, 2010) が小学校外国語活動の英語における品詞について、名詞が圧倒的に高いという結果を示したことが本研究でも検証された。直接的に名詞に関わるタグとして、単数名詞 (1 位)、複数名詞 (7 位)、単数固有名詞 (15 位) が挙げられ、間接的に関わるタグとして、定冠詞 (8 位)、不定冠詞 (13 位)、所有格 (17 位)、単数指示詞 (24 位) が挙げられる。よって一般に小学校英語活動において、名詞の使用は一般名詞、固有名詞ともに顕著な割合を示すといっていよう。

次に表記形で上位に位置し、先行研究 (神谷他, 2009) で指摘のあった 1 人称文であるが、2 人称文も同じくかなりの割合を示すことが確認された (1 人称代名詞:4 位、be 動詞 am:16 位、2 人称代名詞:5 位、be 動詞 are:18 位)。付け加えて代名詞においては、be 動詞 (is: 6 位)、it (22 位)、単数指示詞 (this, that : 24 位) が確認されることから、具体的に指示可能な物体に関連する英語活動が多いことが確認できる。

最後に一般動詞において、非常に興味深い事実が当結果から確認できる。一般動詞に関連するタグは動詞基本形 (2 位)、不定詞 (9 位)、do 基本形 (19 位)、法助動詞 (23 位)、現在分詞 (25 位)、

表 5: CEJES 改訂版における上位 30 種の品詞タグ, 意味タグ (R: Rank, T: Tag, F: Freq)

Part of Speech				Semantic Category			
R	T	F	% Description	R	T	F	% Description
1	NN1	6612	20.06 singular common noun (e.g. book, girl)	1	Z5	6245	18.95 Grammatical bin
2	VV0	1955	5.93 base form of lexical verb (e.g. give, work)	2	Z8	5009	15.20 Pronouns
3	JJ	1669	5.06 general adjective	3	A3+	1879	5.70 Existing
4	PPIS1	1519	4.61 1st person sing. subjective personal pronoun (I)	4	Z4	1267	3.84 Discourse Bin
5	PPY	1121	3.40 2nd person personal pronoun (you)	5	N1	1222	3.71 Numbers
6	VBZ	1117	3.39 is	6	F1	876	2.66 Food
7	NN2	1069	3.24 plural common noun (e.g. books, girls)	7	L2	754	2.29 Living creatures: animals, birds, etc.
8	AT	1026	3.11 article	8	T1.3	538	1.63 Time: Future
9	VVI	993	3.01 infinitive (e.g. to give... It will work...)	9	Z99	475	1.44 Unmatched
10	II	973	2.95 general preposition	10	M1	449	1.36 Moving, coming and going
11	MC	967	2.93 cardinal number, neutral for number (two, three..)	11	M6	437	1.33 Location and direction
12	UH	943	2.86 interjection (e.g. oh, yes, um)	12	Z1	419	1.27 Personal names
13	AT1	879	2.67 singular article	13	A1.1.1	403	1.22 General actions / making
14	ZZ1	835	2.53 singular letter of the alphabet (e.g. A,b)	14	P1	395	1.20 Education in general
15	NP1	744	2.26 singular proper noun (e.g. London, Jane)	15	B1	391	1.19 Anatomy and physiology
16	VBM	657	1.99 am	16	S4	365	1.11 Kin
17	APPGE	576	1.75 possessive pronoun, pre-nominal (e.g. my, your)	17	O2	345	1.05 Objects generally
18	VBR	485	1.47 are	18	B5	341	1.03 Clothes and personal belongings
19	VD0	456	1.38 do, base form (finite)	19	A9+	337	1.02 Getting and possession
20	DDQ	444	1.35 wh-determiner (which, what)	20	E2+	329	1.00 Like
21	RR	431	1.31 general adverb	21	A7+	327	0.99 Likely
22	PPH1	422	1.28 3rd person sing. neuter personal pronoun (it)	22	A5.1+	327	0.99 Evaluation: Good/bad
23	VM	418	1.27 modal auxiliary (can, will, would, etc.)	23	X3.4	295	0.90 Sensory: Sight
24	DD1	374	1.13 singular determiner (e.g. this, that, another)	24	Q1.2	288	0.87 Paper documents and writing
25	VVG	364	1.10 -ing participle of lexical verb (e.g. giving)	25	Z2	245	0.74 Geographical names
26	CC	317	0.96 coordinating conjunction (e.g. and, or)	26	Q2.2	239	0.73 Speech acts
27	RRQ	298	0.90 wh- general adverb (where, when, why, how)	27	X7+	236	0.72 Wanted
28	TO	266	0.81 infinitive marker (to)	28	I2.2	230	0.70 Business: Selling
29	VM21	247	0.75 let's	29	O4.3	230	0.70 Colour and colour patterns
30	MC1	246	0.75 singular cardinal number (one)	30	K5.1	229	0.69 Sports

勧誘文を示す let's (29 位) であり、何らかの文法的な操作を必要とするものは唯一現在分詞のみである。つまり現在分詞を構成する -ing 以外は、動詞は必ず基本形を使用することとなり、まさしく小学校英語活動が目指している抽象的な文法的説明の回避を実現しているといつてよい。付け加えて現在分詞の -ing は他の過去形、三単元の s 等に比べて、語法的にも表記上、音声上の例外が少なく、第二言語習得上の形態素習得順位における研究 (Dulay et al., 1974, Hakuta, 1974) でも比較的容易に習得すると言われている。上記に確認された 1) 名詞使用、2) 代名詞使用、3) 動詞の基本形使用の 3 点は次に検証する品詞における過剰使用、過小使用でも検討する。

意味タグに視点を移すと、まず<日常>、<具体>の特徴を持つ意味領域が多く抽出されていることが読み取れる。上位から考察すると、「数」(5 位)、「食べ物」(6 位)、「生物:動物」(7 位)、「人体と生理機能」(15 位)、「親類関係」(16 位)、「一般物」(17 位)、「衣類」や「個人所有物」(18 位) など、身の回りにあり、具体的に指示可能なものが多い。また先行研究結果において、不一致のみられた「スポーツ」の範疇は、CEJES において、30 位にランクしており、小学校英語活動でもよく扱われていると言えよう。

次に動詞の意味領域に着目すると、「移動」(e.g. come, go, walk, jump, get up) (10 位)、「一般的行為」(e.g. do, make) (13 位)、「発話行為」(e.g. ask, answer, tell, call, shout) (26 位)、「ビジネス」(e.g. buy, sell, shop, shopping) (28 位) と具体的な行為を表す動作動詞が上位に位置している。比較して状態動詞は、3 位の「存在」(be 動詞)、20 位の「好み」(like, enjoy)、27 位の「願望」(want, wish) の範疇で、例示してある動詞がほぼ当範疇の動詞の全てを占めていることから、動作動詞が状態動詞よりも頻度、多様性とも高く、実際に動作可能で、身体感覚に関連付けられる動詞 (樋口他, 2003; 石川・中嶋, 2010) が小学校英語活動で頻出していると言える。

上記意味タグの結果によって、先行研究結果が提示してきた小学校英語活動の意味領域の傾向である 1) 具体 (樋口他, 2003; 西垣・中條・西岡, 2007; 管, 2009)、2) 日常 (身近) (樋口他, 2003; 西垣・中條・西岡, 2007)、3) 動作可能な動詞 (樋口他, 2003; 石川・中嶋, 2010) の 3 点が確認された。

4.3 品詞における過剰使用・過小使用

以下の表 6、表 7 に CEJES と JHSTX の比較における CEJES 側の過剰使用・過小使用を示し、先行研究により予期されていた結果にハイライトを施した。

先行研究結果と表 6、表 7 の結果から、前述の 1) 一般名詞、2) 1 人称、2 人称代名詞単数、3) 動詞の基本形の 3 点が小学校外国語活動の特徴であり、対照的に中学校英語教育の特徴は 1) 副詞、前置詞、接続詞、2) 3 人称単数、および人称代名詞複数 (e.g. we, they) の使用、3) 動詞の 3 人称単数形、過去形、過去分詞形の 3 点が挙げられる。付け加えて小学校英語活動では、WH 疑問詞を過剰使用しており、対話形式の質疑応答表現が多用される様子が伺え (仁科・藤原・松岡 2009)、中学校英語教育では、否定文 (not, n't) の過剰使用から、否定の文法的操作を小学校英語活動は回避する傾向があると読み取れる。上記は先行研究結果を検証し、支持しうる結果である。

表 6 : CEJES と JHSTX の比較における過剰使用 : 品詞^{iv}

R	POS	CEJES JHSTX		over/ under	LL	(p<.001)
		%	%			
1	NN1	20.06	12.77	+	640.52	singular common noun (e.g. book, girl)
2	VBM	1.99	0.61	+	309.34	am
3	VV0	5.93	3.43	+	265.51	base form of lexical verb (e.g. give, work)
4	PPIS1	4.61	3.22	+	97.22	1st person sing. subjective personal pronoun (I)
5	PPY	3.40	2.37	+	72.14	2nd person personal pronoun (you)
6	NPD1	0.48	0.15	+	69.93	singular weekday noun (e.g. Sunday)
7	DDQ	1.35	0.95	+	26.27	wh-determiner (which, what)
8	VBR	1.47	0.89	+	57.63	are
9	VM22	0.29	0.08	+	49.91	let
10	VM21	0.75	0.41	+	38.82	let's
11	ZZ1	2.53	2.01	+	23.55	singular letter of the alphabet (e.g. A, b)
12	VD0	1.38	1.04	+	19.54	do, base form (finite)
13	JJ	5.06	4.52	+	12.06	general adjective

表 7 : CEJES と JHSTX の比較における過小使用 : 品詞

R	POS	CEJES JHSTX		over/ under	LL	(p<.001)
		%	%			
1	VVD	0.52	2.23	-	424.88	past tense of lexical verb (e.g. gave, worked)
2	VBDZ	0.12	0.65	-	146.24	was
3	VVN	0.15	0.69	-	141.45	past participle of lexical verb (e.g. given)
4	PPHS1	0.59	1.39	-	126.46	3rd person sing. subjective personal pronoun (s/he)
5	IF	0.18	0.65	-	105.77	for (as preposition)
6	VDD	0.16	0.54	-	83.35	did
7	CCB	0.10	0.43	-	81.70	adversative coordinating conjunction (but)
8	IO	0.23	0.67	-	81.33	of (as preposition)
9	II	2.95	4.15	-	77.19	general preposition
10	RR	1.31	2.13	-	75.65	general adverb
11	RG	0.29	0.66	-	55.27	degree adverb (so, very)
12	VDZ	0.06	0.27	-	51.65	does
13	PPHO1	0.08	0.29	-	50.31	him/her
14	IW	0.18	0.41	-	35.93	with, without (as prepositions)
15	RT	0.49	0.83	-	34.90	quasi-nominal adverb of time (e.g. now, tomorrow)
16	CS	0.20	0.43	-	34.04	subordinating conjunction (e.g. if, because, so)
17	PPHS2	0.19	0.40	-	29.10	they
18	PPHO2	0.05	0.17	-	29.02	them
19	XX	0.61	0.94	-	27.63	not, n't
20	VVGK	0.04	0.15	-	26.90	-ing participle catenative (going in be going to)
21	APPGE	1.75	2.25	-	24.24	possessive pronoun, pre-nominal (e.g. my, our)
22	CST	0.05	0.15	-	20.35	that (as conjunction)
23	PPH1	1.28	1.67	-	20.15	3rd person sing. neuter personal pronoun (it)
24	PPIS2	0.37	0.59	-	19.49	1st person plural subjective personal pronoun (we)
25	NNT2	0.07	0.18	-	16.52	temporal noun, plural (e.g. days, weeks, years)
26	VVI	3.01	3.54	-	16.21	infinitive
27	PPGE	0.02	0.09	-	15.72	nominal possessive personal pronoun
28	VVZ	0.47	0.68	-	15.06	s form of lexical verb (e.g. gives, works)
29	DD	0.17	0.31	-	14.66	determiner (e.g. any, some)
30	VH0	0.39	0.57	-	12.75	have, base form (finite)

iv 固有名詞、敬称、数詞、間投詞は英語の特徴を示す情報としてあまり有益でないため、除去した。

次に先行研究結果では指摘がなされていない部分を拾い上げる。まず CEJES における形容詞の過剰使用が注意をひくだろう。先行研究では形容詞は、小学校ではなく中学校を特徴づける品詞として挙げられていた（西垣・中條・西岡，2007）。そこで、CEJES の形容詞タグの高頻度語上位 5 位を抽出すると、fine、happy、hungry、sleepy、good の 5 語であった。この 5 語全てに共通するのは、教室英語の挨拶で用いられる "How are you?" への応答文 (I'm ~.) で使用されうる語であり、当結果の過剰使用をもって、小学校英語活動の方が形容詞をより頻繁に使用する、とは結論しがたい。そこで実際に頻度と多様性両方を詳細に統計分析した結果、小学校でも頻繁かつ多様に使用されている実態が確認され、またその使用は叙述用法よりも限定用法中心であることが判明した（詳細は藤原・仁科・松岡，2010）

また先行研究では取り扱われていない中学校英語教育の特徴として、未来表現 (be going to)、現在完了 (have + p.p)、不定詞が挙げられる。先行研究（樋口他，2003; 酒井，2007）では中学 1 年生のテキストを利用しているため、通例中学 2 年生の学習項目である未来表現、中学 3 年生の項目である現在完了が見落とされていることは想像に難くない。また不定詞は小学校英語活動上も頻出項目であったが、小学校英語活動では Nice to meet you, I want to ~, I would like to ~ のような定型表現が大半であり、より生産的な不定詞表現は中学校英語に見受けられることが推察される。

4.4 意味における過剰使用・過小使用

次の表 8、表 9 に意味領域における CEJES 側の過剰使用、過小使用の結果を総括し、品詞と同じく先行研究（樋口他，2003; 西垣・中條・西岡，2007; 中條・西垣，2010）によって、期待されていた結果が検証された部分にはハイライトを施した。しかしながら、「日常生活」という意味領域がどこまで適用されるべきかが不透明であるため、かなり明確に「日常生活」に関わる意味領域のみ、検証済みとした。当結果においては、予測されていない意味領域が多岐にわたるため、詳細な分析は別の機会に譲ることとし、本研究では先行研究結果に補足し得る情報を抽出することを試みたい。

まず小学校英語活動から中学校英語教育の以降における意味領域の変遷として、1) 具体—抽象（樋口他，2003; 西垣・中條・西岡，2007; 管，2009）、2) 日常（身近）—社会（樋口他，2003; 西垣・中條・西岡，2007）の 2 点が確認できる。1) については、小学校では先行研究で指摘されていた「食べ物」、「動物」、「衣類」、「体の部位」など「具体」的な事物から、中学校では「時間」(Time: future, Time: past, Time period: long, Time: beginning) や「空間」(places)、
「言語・思考関連」(Speech: Communicative, Knowledgeable, Thought, belief, Language, speech and grammar, Linguistic Actions, States and Processes, Telecommunications) という「抽象」概念への移行の傾向が明確に表れている。次に 2) については、上記の「具体」でも挙げた「日常」的な事柄から、「人々」(e.g. people, children, host, person)、「義務」(e.g. must, have to, should, need, promise)、「社会的行為」(e.g. visit, introduce, behave, tradition, habit) に現れるような「社会」の意味領域への接続がみうけられる。この日常—社会の意味の変遷軸は、前述の品詞の結果の 1 つである代名詞の特徴にも見出される。即ち小学校英語活動では 1 人称、2 人称中心なのに対し、中学校英語教育は 3 人称単数、および複数の特徴を有

していた。つまり I, you から s/he, we, they への移行、身近から社会への領域の拡大が小学校から中学校への1つの重要な軸であるといえる。

表 8: CEJES と JHSTX の比較における過剰使用：意味^v

R	SEM	CEJES JHSTX		over/ under	LL	p < .001
		%	%			
1	F1	2.66	0.66	+	518.13	Food
2	L2	2.29	0.56	+	449.40	Living creatures: animals, birds, etc.
3	B5	1.03	0.27	+	195.12	Clothes and personal belongings ,
4	B1	1.19	0.38	+	172.03	Anatomy and physiology
5	Z4	3.84	2.26	+	163.71	Discourse Bin
6	I2.2	0.70	0.21	+	110.66	Business: Selling
7	L3	0.66	0.19	+	108.53	Plants
8	F1-	0.29	0.03	+	105.22	Lack of food
9	O4.3	0.70	0.24	+	91.94	Colour and colour patterns
10	H5	0.41	0.12	+	63.26	Furniture and household fittings
11	F2	0.32	0.09	+	57.28	Drinks and alcohol
12	X3.2+	0.14	0.01	+	55.40	Sound: Loud
13	M2	0.62	0.27	+	54.13	Putting, pulling, pushing, transporting
14	K6	0.19	0.03	+	50.87	Children's games and toys
15	B4	0.28	0.07	+	50.66	Cleaning and personal care
16	A3+	5.70	4.58	+	47.44	Existing
17	T1.3	1.63	1.07	+	46.10	Time: Period
18	X3.4	0.90	0.50	+	43.80	Sensory: Sight
19	B3	0.24	0.07	+	39.98	Medicines and medical treatment
20	I1	0.22	0.06	+	38.80	Money generally
21	Q1.2	0.87	0.51	+	38.14	Paper documents and writing
22	O2	1.05	0.64	+	37.92	Objects generally
23	T1.2	0.26	0.09	+	35.85	Time: Momentary
24	O4.4	0.22	0.07	+	30.40	Shape
25	S2.1	0.54	0.30	+	26.91	People: Female
26	K4	0.16	0.05	+	26.30	Drama, the theatre and show business
27	X7+	0.72	0.45	+	23.66	Wanted
28	H2	0.32	0.16	+	20.27	Parts of buildings
29	X3.2	0.43	0.25	+	20.09	Sensory: Sound
30	M3	0.68	0.45	+	18.10	Vehicles and transport on land
31	F4	0.12	0.04	+	17.22	Farming & Horticulture
32	K5.2	0.29	0.15	+	16.91	Games
33	W2	0.10	0.03	+	15.96	Light
34	M4	0.27	0.14	+	15.50	Sailing, swimming, etc.
35	Q4.2	0.08	0.02	+	15.17	The Media: Newspapers etc.
36	A5.1+	0.99	0.74	+	14.83	Evaluation: Good
37	M5	0.18	0.08	+	14.82	Flying and aircraft
38	E4.1+	0.45	0.30	+	12.18	Happy
39	O4.6+	0.15	0.07	+	11.95	Temperature: Hot / on fire

^v 日本語を含む多言語からの外来語による unmatched、固有名詞による personal names、geographical names の意味範疇を除去した

表 9: CEJES と JHSTX の比較における過小使用：意味

R	SEM	CEJES JHSTX		over/ under	LL	<i>p</i> < .001
		%	%			
1	Z5	18.95	22.93	-	145.39	Grammatical bin
2	S2	0.13	0.62	-	127.77	People
3	N5.1-	0.02	0.27	-	94.35	Part
4	M45.1.3	0.42	0.88	-	64.35	Time: Future
5	A13.3	0.30	0.69	-	61.52	Degree: Boosters
6	M7	0.23	0.58	-	59.40	Places
7	X5.2+	0.02	0.18	-	56.18	Interested/excited/energetic
8	M45.1.1	0.09	0.33	-	55.63	Time: Past
9	A1.5.1	0.05	0.24	-	53.00	Using
10	Q2.1	0.52	0.98	-	52.31	Speech: Communicative
11	Y2	0.05	0.24	-	49.77	Information technology and computing
12	X2.2+	0.12	0.35	-	44.02	Knowledgeable
13	X2.1	0.07	0.27	-	43.56	Thought, belief
14	A6.1-	0.05	0.23	-	42.97	Comparing: Different
15	N6+	0.10	0.29	-	37.20	Frequent
16	Z6	0.64	1.01	-	32.59	Negative
17	S6+	0.12	0.30	-	31.96	Strong obligation or necessity
18	A2.2	0.07	0.21	-	29.79	Cause&Effect/Connection
19	A6.2+	0.03	0.12	-	22.63	Comparing: Usual
20	Q3	0.22	0.40	-	22.26	Language, speech and grammar
21	A14	0.05	0.16	-	22.03	Exclusivizers/particularizers
22	T1.3+	0.02	0.09	-	20.97	Time period: long
23	E2+++	0.02	0.09	-	20.97	Like
24	A5.1+++	0.02	0.08	-	19.31	Evaluation: Good
25	Q1.1	0.05	0.16	-	19.20	Linguistic Actions, States And Processes; Communication
26	X8+	0.09	0.21	-	18.81	Trying hard
27	T15.1.1	0.09	0.21	-	18.27	Social Actions, States And Processes
28	N5+	0.31	0.49	-	15.78	Quantities: many/much
29	T2+	0.06	0.15	-	14.70	Time: Beginning
30	Q1.3	0.04	0.11	-	11.44	Telecommunications
31	A2.1+	0.07	0.15	-	11.27	Change

最後に当表の結果から、小学校外国語活動の動詞に関し、実際に動作可能で、身体感覚に関連付けられる動詞（樋口他, 2003; 石川・中嶋, 2010）が多いとの指摘は、3) 感覚—論理の意味変遷軸に統合され得ることを指摘したい。CEJES から抽出される多くの動詞が状態動詞ではなく、動作動詞であることは表 5 に示した通りであり、付け加えて、この表 8 からいわゆる「五感」に関連する意味領域が、小学校外国語活動の英語を特徴づけていることが見出せる。例えば、中学校英語との比較から、小学校英語活動の過剰使用意味領域として、視覚においては「感覚：視覚」(e.g. see, look at, watch, peep)、「光」(e.g. light(s), rainbow, shine)、聴覚は「感覚：聴覚」(e.g. listen, hear, sound(s), squeak, siren(s), noise)、「音：大きさ」(e.g. loud, jingle, noisy)、味覚においては、統計的に最も有意である「食料」、付けくわえて触覚に関連する項目として「温度：暑さ」(e.g. hot, fire, warm) が挙げられている。よって、動作可能かつ身体感覚を表す動詞（樋口他, 2003; 石川・中嶋, 2010）が小学校英語活動の特徴づけているといえよう。

この小学校英語の「感覚」という特徴に対して、中学校英語には「論理」に関連する項目が次のように挙げられる（表9参照）：「思考」（e.g. think, feel, believe, opinion, thought）、「比較：差異」（e.g. different, difference, disagree）、「比較：同様」（e.g. similar, agree, look like）、「原因・結果」（e.g. why, because of, reason(s), cause）。この「論理」を示す項目は、品詞の小学校英語活動の過小使用において「従属接続詞」（e.g. if, because, so）が挙げられていたことを鑑みても、中学校英語では論理に関連する意味領域語彙、また接続詞を用いて、自身の意見を論理的に表現することが開始され、後に高校英語に接続されていくことが示唆されている。

4.5 まとめ

ここでは上記の結果を上述の3つの研究課題を振り返りつつ総括する。

- (1) 中学校英語教科書との比較を通して、小学校外国語活動の語彙にはどのような品詞の特徴があるか？

小学校外国語活動における品詞の特徴は、1) 名詞中心、中学校英語教育においては1) 副詞、2) 前置詞、3) 接続詞が特徴的である。動詞においては、文法的特徴が強いため、以下の(2)の研究課題にて詳細を述べる。形容詞については、先行研究では中学校の特徴が強いと報告であったが、本研究では小学校でも頻度、多様性においてもある一定量の使用が認められた（藤原・仁科・松岡, 2010）。

- (2) 中学校英語教科書との比較を通して、小学校外国語活動にはどのような文法の特徴があるか？

小学校外国語活動における文法の主たる特徴は、比較的狭い I-you の世界を示す 1) 1人称・2人称代名詞単数 (i.e. I, you)、および 2) be 動詞 (am, are)、教師側の動詞の文法説明、また学生側に高い認知能力を要求する文法的操作を回避する 3) 動詞の基本形、及び 4) 勧誘文 (let, let's) の多用、コミュニケーションを簡便かつ円滑に進める上での 5) WH 疑問文である。WH 疑問文は質疑応答上、文で応答することを必ずしも要求せず、いわゆる一語文 (Q: What sport do you like? A: Tennis.) で応答可能であることは注目に値する。つまり、コミュニケーション活動等の WH 疑問文使用は、応答が一語の場合が寧ろ自然な場合が多くあり、そのため文法操作を回避することができる。このような英語活動はまさしく「慣れ親しむ」ための英語のコミュニケーションを可能にするだろう。

中学校英語教育は、それとは対照的に他者、社会をより意識した比較的広い 1) 3人称単数、および 2) 人称代名詞複数 (i.e. we, they)、文字の積極的な導入および抽象的文法説明を要する 3) 動詞の3人称単数現在形、4) 過去形、5) 過去分詞形、および 6) 否定文 (not, n't) である。付け加えて中2・3の学習範囲まで視野を広げると、7) 未来表現 (be going to)、8) 現在完了 (have + p.p) が挙げられ、いずれも抽象的な時間における思考と文法操作を要するものが上級学年に設定されている。

- (3) 中学校英語教科書との比較を通して、小学校外国語活動の語彙にはどのような意味領

域の特徴があるか？

上述のように紙幅の都合上、仔細な分析は機会を改めるが、先行研究と当分析結果から小学校外国語活動における意味の主たる特徴は、「具体」、「日常」、「動作」、「感覚」、中学校英語教育においては「抽象」、「社会」、「状態」、「論理」であるといえる。この小中の意味領域を「小中連携」の観点から変遷軸で表すと、先行研究の確認項目として1) 具体—抽象（樋口他, 2003; 西垣・中條・西岡, 2007; 管, 2009）、2) 日常（身近）—社会（樋口他, 2003; 西垣・中條・西岡, 2007）、また本研究での新規追加項目として3) 感覚—論理の変遷軸の3点が確認された。

5. 結語および今後の研究方向性

本研究の主たる目的は小学校外国語活動の言語的特徴、即ち語彙の品詞、及び意味、また文法的側面を、コーパス言語学的アプローチから明らかにし、小学校英語活動、および中学校英語教育のある程度の全体像を、小・中、両種の教員に提供することである。当目的を省みて、本研究では、関連研究を網羅的に概括し、ある一定の信頼性のある言語資料と分析ツールを利用し、先行研究結果の検証を行うと同時に、幾つかの新たな視点を提供したという点において、一定の成果を上げたといえよう。

しかしながら、研究の問題点として挙げたように、Wmatrix2 はあくまでマクロな量的全体像を提示する上で最も優れたツールであり、よりミクロな質的かつ量的検証は各結果において必要と思われる。例えば1) 意味領域の詳細な分析を行う必要がある。先行研究と本研究結果から、具体—抽象、日常—社会の観点、また感覚—論理の3つの意味変遷軸が小中連携に関わっていることが示唆されるが、他の小学校、および中学校英語を特徴づける意味領域結果が多数提示されている。この2点においては分析検討の余地があり、今後明らかにしていきたい。また2) 当教材に示された言語的特徴が果たして第二言語習得上、妥当かどうか、考察を加える必要がある。

まずは現時点で招集可能な教材の分析をまとめ、本プロジェクトの主旨である「小中連携」を円滑に図り得る言語資料（語彙表、フレーズ表、文法表現集）を各教育現場に分かりやすい形で公表していくことに務めていき、「小中連携」に寄与していく所存である。

参考文献

- 石川慎一郎. (2005). 「日本人児童用英語基本語彙表開発における頻度と認知度の問題：母語コーパスと対象語コーパスの頻度融合の手法」『信学技報（電子情報通信学会）TL2005』 pp.43-48.
- 石川慎一郎. (2007). 「L1/L2 コーパスの解析に基づく児童英語教育のための語彙マテリアル抽出システムの開発—小学校英語教育のための語彙選定の視点」『中部地区英語教育学会紀要』 36: 317-324.
- 石川慎一郎・中嶋洋一. (2010). 「児童英語教材開発のためのコーパスデータの活用：NHK『えいごルーキー GABBY』における言語材料の選定」日本児童英語教育学会（JASTEC）第31回全国大会 発表原稿
- Willis, D. (1990). *The Lexical Syllabus*. London and Glasgow: Collins.
- 神谷昇・長谷川信子・町田なほみ・長谷部郁子. (2009). 「『英語ノート（試作版）』の語彙の特徴—品詞と意味の観点から」*Scientific Approaches to Language*. 8: 119-145.
- 管正隆. 『英語ノート』実践研究会. (2009). 『平成20年度出版 小学校学習指導要領 ポイントと学習活動の展開 外国語活動』 東洋館出版社

- 酒井英樹. (2007). 「小中連携から見た教材作成のあり方」『小学校英語と中学校英語を結ぶ：英語教育における小中連携』 pp. 119-133.
- 中條清美・西垣知佳子. (2010). 「小学校『英語ノート』の語彙分析」『英語コーパス研究』17: 115-126.
- 中條清美・西垣知佳子・内山将夫・岩楯弘美・山崎淳史. (2005). 「英語絵辞書の語彙」『日本大学生産工学部研究報告』38: 77-105.
- 中條清美・西垣知佳子・宮崎海理. (2009). 「小学校5・6年生『英語ノート』の語彙一覧」『日本大学生産工学部研究報告』42: 99-115.
- 中條清美・西垣知佳子・西岡菜穂子・山崎淳史・白井篤義. (2006). 「小学校英語活動用テキストの語彙」『日本大学生産工学部研究報告』39: 79-109.
- 中條清美・西垣知佳子・吉森智大・西岡菜穂子. (2007). 「小, 中, 高一貫型英語語彙シラバス開発のための基礎研究」*Language Education & Technology*. 44: 23-42.
- 鳥飼玖美子. (2006). 『危うし！小学校英語』東京：文春新書
- Dulay, H. C. and M. K. Burt. (1974). 'Natural sequences in child second language acquisition.' *Language Learning*. 24: 37-53.
- 中山兼芳. (2001). 『児童英語教育を学ぶ人のために』東京世界思想社
- 西垣知佳子・中條清美・小松幸子. (2009). 「小学校英語のための語彙教材の開発と実践」『日本大学生産工学部研究報告』42:67-78.
- 西垣知佳子・中條清美・西岡菜穂子. (2007). 「小学校英語テキスト出現語彙の意味領域による分析」『日本児童英語教育学会研究紀要』26:15-25.
- 仁科恭徳・藤原康弘・松岡結. (2009). 「小学校英語教育のための重要フレーズおよび定型表現の抽出：前置詞・WH疑問詞表現の場合」*JACET Kansai Journal*. 11: 14-32.
- Hakuta, K. (1974). 'A preliminary report on the development of grammatical morphemes in a Japanese girl learning English as a second language.' Reprinted in E. M. Hatch(ed.) . (1978) . *Second Language Acquisition: A Book of Readings*. Rowley, MA: Newbury House.
- 樋口忠彦・加賀田哲也・衣笠知子・金澤直志・福智佳代子・掛谷舞・他. (2003). 「小・中連携に関する調査研究：カリキュラム・指導案集・テキスト等の分析を通して」『英語授業研究学会紀要』12:3-30.
- 樋口忠彦・加賀田哲也・衣川知子・泉恵美子. (2004). 「[投稿]小・中連携に関する調査研究と提言」『英語教育』3月号, 45-50.
- 藤原康弘・仁科恭徳・松岡結. (2010). 「小学校外国語活動における品詞・文法へのコーパス言語学的アプローチ」*JACET Chubu Journal*. 8: 15-31.
- McArthur, T. (1981). *Longman Lexicon of Contemporary English*. Essex: Longman.
- 松川禮子・大下邦幸. (2007). 『小学校英語と中学校英語を結ぶ—英語教育における小中連携』東京：高隆社書店
- 文部科学省. (2001). 『小学校英語活動実践の手引き』東京：開隆堂
- 文部科学省. (2008a). 『小学校学習指導要領』東京：文部科学省
- 文部科学省. (2008b). 『中学校学習指導要領』東京：文部科学省
- 文部科学省. (2008c). 『小学校学習指導要領：外国語活動解説』東京：文部科学省
- 文部科学省. (2009). 『小学校外国語活動 研修ガイドブック』東京：旺文社
- Lewis, M. (1993). *The Lexical Approach*. Hove: Language Teaching Publications.
- Rayson, P. (2009). Wmatrix: a web-based corpus processing environment, Computing Department, Lancaster University.